パースに対するクワインの批判の検討

佐々木　崇

＜はじめに＞

認識論に関する自然主義は、クワインの哲学の到達点を示すとともに、現代の議論に影響を与えている主張である。この主張は哲学の身分にも関わる帰結を有し、その主張の妥当性に関して多くの議論を喚起するものである。クワインがこの主張に到達した背景には、経験主義及び可謬主義を徹底させる立場からの伝統的認識論に対する批判があると言える。この点で、同様に伝統的認識論を批判して可謬主義的認識論を主張しつつ、自然主義とは相容れない主張を展開したパースの議論は、クワインの主張を考察し自然主義に関する議論を進める上で、有意義な教訓を与える可能性を有している(1)。

本論文は、自然主義に関するパースとクワインの主張を比較し、特にパースに対するクワインの批判を考察することによって、パースの主張から汲み取れる論点を探ることを目的とする。まずクワインの自然主義の主張とそれを支える議論を示し＜１＞、次にパースの自然主義的主張と反自然主義的主張を概観し＜２＞、パースに対するクワインの批判の論点を明確にした上で＜３＞、各論点の検討から得られる問題点を考察する＜４＞。

＜１＞　クワインの自然主義

自然主義的認識論とは、第一哲学としての特権的身分を有する認識論を否定して、科学と身分を異にすることのない認識論を主張するものであり、その結果として自然主義的認識論は、諸科学がもたらす経験的な資料を活用することが許される。クワインは、自らの立場として、この認識論に関する自然主義を主張する。では、どのような根拠でクワインは認識論に関する自然主義を主張するのだろうか。

その論拠の代表的なものは二つある(2)。ひとつは、特にカルナップに代表される基礎付け主義的認識論が失敗したという主張である。もうひとつは、普遍的懐疑が不可能であるという主張である。この二つの論拠は、意味論的・認識論的全体論によって支えられている。つまり、経験主義的な基礎付け主義が失敗したとされるのは、全体論によって、個々の文が経験的内容を有することが否定されるからである。また、懐疑論が批判されるのも、全体論によって、懐疑論の提示する懐疑自体が科学的知識を前提するとされるからである。

そして、この二つの論拠から自然主義が主張される。すなわち、基礎付け主義的認識論の崩壊にもかかわらず、我々は懐疑論に陥ることはなく、第一哲学としての基礎付け主義的認識論を否定して、諸科学がもたらす経験的情報の活用が許されるような、科学内部での認識論を遂行することができるとされる。

この自然主義に関しては膨大な議論がなされ、現在もなされているが、自然主義に対する典型的な批判は次のものである。すなわち、自然主義は認知に関する科学的・記述的な説明を与えはするが、伝統的な認識論の根本問題である規範に関する諸問題を扱うことができないという批判である。単純化して言えば、認識論が取り組む問いとして、「いかにして我々は知識を獲得し改訂するべきか」という規範的問いと、「いかにして我々は知識を獲得し改訂するか」という記述的問いがあるとすると、自然主義は、前者の問いが後者の問いに置き換え可能である、もしくは、両者の問いに関する研究が同じ答えに至ると主張するが、反自然主義は、前者の問いは後者に置き換え不可能であり、後者の問いに関する研究がもたらす帰結を前者の問いに関する研究に活用することはできないと主張する(3)。

こうした批判に対して、クワインはどのように答えるのだろうか。規範的問いと記述的問いの特徴付けに関して、クワインの主張は複数の解釈を許すものである。つまり、伝統的認識論が追求してきた規範に関する問いがそもそも間違った問いであり、自然主義は問い自体を新たに設定し直す必要があるという主張とも解釈できる。また、自然主義は伝統的認識論の問いを引き継ぐものであり、その問いに対して経験科学がもたらす成果を活用して答えようとするものだという主張とも解釈できる(4)。この点は自然主義の立場からも問題になる。つまり、クワインの言う「科学」が有する多義性に起因して、それが広義の経験的信念全体を意味するのか、もしくは、狭義の自然科学を意味するのかに関して解釈の余地があり、認識論が経験的信念全体に相応の位置を占めるのか、もしくは、認識論は消去されて自然科学、特に心理学の一部門に完全に転換されるのかという問題が生じる(5)。しかしいずれにせよ、クワインの自然主義によれば、認識論は経験的信念全体から独立の特権的身分を有さず、規範的な問題に取り組む際にも、その探求において経験科学の成果を循環を恐れずに活用できるものであると主張されることは確かである。例えば、科学的知識に関する認識論で問題とされる、知覚的経験の信頼性や仮説形成の健全性に関して、クワインは進化論がもたらすとされる自然選択や生存価へ訴えているということを指摘することができる。つまりクワインの自然主義の基本的な主張とは、変化しつつ進展していくような、世界に関する我々の経験的・可謬的信念全体の内部において認識論を遂行しようとするものであると言えよう。では、こうしたクワインの自然主義と比較して、先駆的に可謬主義を主張しつつ、同時に自然主義を全面的に否定したパースの議論とはどのよう

なものだろうか。

＜２＞　パースの反自然主義

パースの哲学には、自然主義的傾向と反自然主義的傾向の両側面が併存している[(6)]。本論文は、クワインの自然主義とパースの反自然主義との比較検討を行うのが目的であるので、その全容を詳細に吟味することはできない。それゆえここでは、パースの反自然主義的主張の内容とそれを支える議論に重点を置いて、両側面の主張を検討したい。パースの主張を検討するに当たって、以下の文献を中心に据える。というのも、パースがそこで提出したプラグマティズムの主張は、後の議論で修正や展開がなされるものの、パースの根本的な主張の基本的な骨格をなすものであるからであり、また後に見るように、その主張は、クワインがパースの主張に対して批判を行う際に参照しているものだからである。まず、１８６８年に『思弁哲学雑誌』に発表された三つの連続論文の、第一論文「人間に備わっていると主張されてきた諸能力に関する問い」、第二論文「四能力の否定の帰結」である。次に、１８７７年から７８年に『ポピュラー・サイエンス・マンスリー』誌に発表された六つの連続論文「科学の論理の諸解明」のうちの、第一論文「信念の確定」、第二論文「いかにして我々の観念を明晰にするか」である[(7)]。

パースの自然主義的主張とはどのようなものだろうか。１８６８年の一連の論文で展開されるパースの最も中心的な主題が、デカルトに代表される基礎付け主義的認識論への批判であることに注目できる。「諸能力に関する問い」では、無媒介的な所与としての直観能力の存在が批判される。そして直観の存在を示すように見える現象を検討し、それらが記号媒介的な推論過程の産物であることを示そうとする。パースは、認識を直接的所与に基づける基礎付け主義的認識論を批判して認識の媒介的特徴を示した上で、「四能力の否定の帰結」において、そうした批判の一般的帰結を考察して独自の可謬主義的認識論を提示する。そうした帰結の中でも、自然主義との関わりで特に注目できるのは、デカルトの認識論を構成する普遍的懐疑と真理の基礎とに対する否定的帰結である。

まず普遍的懐疑に関しては、パースは、哲学の出発点としての普遍的懐疑が不可能であり自己欺瞞であると主張する。我々は哲学を探究し始める際にも、「そのとき我々が実際に持っている全ての偏見を伴って出発しなければならない」(CP, 5.265)。また、探求において懐疑が生じるのも、「懐疑のための積極的な理由によって疑う」(ibid)のであって、「心では疑っていないのに哲学では疑うふりをする」(ibid)のは自己欺瞞である。次に真理の基準に関しては、パースは、デカルトが懐疑を経た上で真理の基準として主張する自己意識の確実性を批判する。「単独の個人に真理の絶対的判定をさせるのは最も有害なこと」

(ibid)であり、科学では、人々の一致が目指される。そして、「我々は個人としては、我々が探求する究極的哲学に到達すると合理的に望むことはできない。それゆえ、我々はそうした哲学を哲学者の共同体に対してのみ求めることができる」(ibid)。また、哲学は科学の方法を真似るべきであり、決定的な論証よりも多様な論証を信頼し、一本の鎖のような推論ではなく、十分な数があり密接に相互連関した綱からなる太綱のような推論を形成すべきである(ibid)。こうした議論は自然主義的主張につながると考えられる。つまり、我々の認識全体を検討する立場を要求する普遍的懐疑は不可能であり、懐疑は現在の他の信念を前提して、その可謬的な信念全体の内部で遂行されねばならない。また認識論は科学と身分を異にする探求ではなく、むしろ科学と方法を共有し、探求者の相互批判を経て進行する可謬的な信念の内部で遂行される。このように理解すれば、パースの主張は自然主義に近いものと解釈することができると考えられる[8]。

では、パースの反自然主義的主張とはどのようなものだろうか。この点を検討するために、「信念の確定」と「いかにして我々の観念を明晰にするか」の議論を見てみよう。「信念の確定」では、探求が懐疑を原因として生じるような、信念を得るための努力であるとされ、探求の唯一の目的が懐疑から信念の確定に至ることとされる(CP, 5.374, 5.375)。そして、信念の確定のための四つの方法、すなわち、固執の方法、権威の方法、アプリオリな方法、科学の方法が検討され、どの方法を信念の確定の手段として選択するかが問題とされる。この方法の選択は、「どんな知的な意見の採用よりもはるかに重要で、選択者の生を支配する決断の一つであり、一旦なされれば固守せねばならない」(5.387)ものである。それゆえ我々は方法を選択する根拠を反省し検討せねばならず、そうした検討を避けるのは「不利益があると同時に不道徳である」(ibid)とされる。

すると、パースが選択すべきであるとする科学の方法とは何であり、それを選択する根拠、すなわち、前科学的方法と比較して科学的方法が優る点は何であろうか。科学の方法は「その方法を用いることで、我々の信念が、人間的なものによってではなく、ある外的な永続性、すなわち、我々の思考がそれに影響を与えないようなものによって、決定されうる」(CP, 5.384)ような方法である。「公的なものとしての真理の把握」(ibid)によって理解できる外的な永続性とは、「全ての人に作用するか、作用しうるもの」(ibid)でなければならず、「科学の方法は、全ての人の究極的結論が同じになるはずのものでなければならない」(ibid)。そしてパースによれば、科学の方法は実在性の概念を前提とする。その実在とは、我々の信念とは完全に独立であり、我々が十分な経験と推論を経た後にその実在についての真なる結論に導かれるであろうようなものである。そして我々は信念が事実に一致するよう願い、「(科学的方法以外の)三つの方法の諸結果が事実に一致する理由はない」

(CP, 5.387)以上、信念の確定の方法として科学的方法を選択すべきであるとされる。

この科学的方法に関しては、「いかにして我々の観念を明晰にするか」でも述べられる。「いかにして我々の観念を明晰にするか」では、プラグマティズムの格率と呼ばれるプラグマティックな意味の理論が提示される。観念を明晰にするためには、その観念が有する行為に関わる実践的帰結を把握することが必要とされる。そしてパースは、「信念の確定」での探求の諸方法に触れる。「科学に従う者全ては、次のような希望によって鼓舞される。すなわち、探求の過程は、それが十分長く追求されたときにのみ、彼らが探求する各問題に一つの確実な答えを与えるであろうという希望である」(CP, 5.407)。多くの探求者が相反する見解を持って探求を始めても、「探求の過程は、彼らの外部の力によって、彼らに一つで同一の結論をもたらす」(ibid)のであり、「この思考の活動は、運命の作用に似ている」(ibid)。そして、この予定された信念という希望は、真理と実在の概念に含まれる。「全ての探求者によって究極的に合意されるべく運命づけられている意見は、我々が真理によって意味するものであり、この意見の中で表現される対象が、実在するものである。これが私が実在性を説明する仕方である」(ibid)。パースの主張をまとめると、信念の確定を目的とする探求を遂行する際、探求者は探求の方法の選択をする必要がある。そして、探求の方法としての科学的方法を選択することは、実在の存在に関する前提を受け入れることを要求する。そして、科学的方法を選択することによって、信念は長期的な探求の果てに全ての探求者によって合意される運命にある。

普遍的懐疑の可能性と主観的な真理の基準とを否定して、デカルトの基礎付け主義的認識論を批判したパースは、自然主義の先駆であるように一見すると思われた。しかし同時にパースは、現在の信念を真理であるとは言わず、科学的方法を探求の方法として自覚的に選択した探求者の共同体が、長期的な探求の果てに最終的に合意するであろうものこそが真理であると主張した。パースによれば、探求者が科学の方法を選択することは、真理と実在に関する前提的把握を受け入れることである。真理とは探求者の信念とは独立したものでありながら、全ての探求者が長期的な探求の果てに合意する信念であり、実在とはそうした真なる信念の対象である実在である。ここには明らかに自然主義に反する主張がある。まず、科学的方法の選択の前提とされる実在概念の要請は、科学的方法を適用した科学的探求の成果を活用しては説明できない。「もしこの（実在の存在の）仮説が私の探求の方法に関する唯一の支持であるなら、私の探求の方法は私の仮説を支持するために用いられてはならない」(CP, 5.384)。そして、こうした実在及び真理の概念を受け入れれば、現段階での信念は、探求者全員の最終的な合意である真理への途上であって、そこから得られる成果が真理を明らかにする保証はない。例えば、ある信念形成を促す要因が種の生

存と存続に有利であることは、科学的方法を選択した探求においてもそれが最終的な実在に関する信念を形成するのに有利であることを保証しないので、進化論も説明に導入できない。パースの強調点は、探求のための前科学的方法と科学的方法を明確に区別し、科学的方法を選択する根拠を示すことである。したがって、パースの議論は、科学的探求の可能性の条件を考察する超越論的視座を含むものであると言える[9]。

＜３＞　パースの真理論に対するクワインの批判

以上のようなパースの主張とクワインの主張を比較すれば、どのような教訓を引き出すことができるだろうか。この問題の一般的考察のための手がかりとして、パースの主張に対するクワインの批判を検討するのが役立つであろう。パースの議論に対するクワインの立場を検討するために参照できる記述として、ここでは次の二つを取り上げる。ひとつは、１９６０年の『ことばと対象』の第一章「言語と真理」の第六節「措定物と真理」の中のパースの真理論に関して批判的に言及している部分である。もうひとつは、１９７５年に「プラグマティズム、その起源と展望」と題された討論会で発表され、同名の論文集に収録された論文「経験主義におけるプラグマティズムの位置」である[10]。この二つから、パースの真理論に対するクワインの批判の論点を取り出すことにしたい。

『ことばと対象』では、パースの真理論がプラグマティックな真理定義の例として批判される。クワインによれば、パースは、「科学的方法でもって真理をあからさまに定義する誘惑に駆られ、真理とは、継続する経験に対して科学的方法の（想定上の）諸規範を不断に使用するときに、極限として接近されるところの理想理論であるとした」(WO, p. 23)。パースの真理論に関するこの記述に付された註では、論文「いかにして我々の観念を明晰にするか」の後半部分の箇所が指摘されている[11]。

このように述べられたパースの真理論に対してどのような批判がなされるのだろうか。クワインはそこに多くの難点があると述べている。そこで実際に言及されているのは次の四つの論点である。まず、科学的方法という最終的な方法論的原則が仮定されていること。次に、無限の過程に訴えていること。さらに、理論の極限について述べる際に、数との類比が誤って使用されていること。最後に、唯一の理想的結果が主張されていること。以上の四つの論点のうち、最初の二つは示唆されているに過ぎず、実際に批判が展開されているのは残りの二つである。三つ目の論点である科学理論の極限についての批判は次のものである。すなわち、極限の概念は、理論に対してではなく数に対して定義される、「より近い」という概念に依存する。それゆえ、科学理論に関して極限の概念を用いるのは、本来は数に対して定義される概念を誤った類比によって理論に対して適用することである。つ

まり、真理の条件として極限的理論を要請するパースの議論は、科学理論の真理に関する議論としては誤った概念を用いている。四つ目の論点である唯一の理想的結果は、先の極限に関する批判を回避しても残される難点であるとされる。つまり、クワインによれば、科学理論の真理の問題は、真理に対する証拠の問題であり、極限を将来の感官刺激の全体とみなして誤った類比を回避しても、そうした刺激の全体に科学的方法を適用した結果として、他の全ての可能な体系化以上にすぐれた唯一の理想的な体系化が認められると想定することはできない。むしろクワインによれば、無数の理論が等しく最良のものとなりうる。以上の難点を指摘した上でクワインは、「科学的方法は真理への手段ではあるが、真理の唯一の定義を原理的にさえ与えるものではない。真理のいわゆるプラグマティックな定義は、どれも同様に失敗する運命にある。」(ibid)と断じる。

こうした『ことばと対象』で提示された論点に加えて、「経験主義におけるプラグマティズムの位置」では、パースの真理論に関して次のような批判がなされている(12)。そこではパースの真理論に関して『ことばと対象』と同様の特徴付けがなされた上で、そうした真理の極限理論は維持できないと批判される。その批判の論点は次の三つである。まず、パースの真理論は、諸理論の継続的な近似という概念に基づいており、これは、類似性に関する諸理論の比較が意味をなすことを想定する。しかし、そうした類似性の基準は示されていない。次に、同一性と差異性に関する諸理論の比較にも問題が生じ、これは理論間での語の翻訳の問題である。世界に関する包括的体系内の限られた部分について競合する理論の場合には、我々は包括的体系の言語を諸理論の境界を越えて固持できるので、同一性と差異性の問題は深刻ではない。しかし、世界に関する競合する体系の場合、我々は事態を打開するための固定した枠組みを持たない。最後に、我々が真偽を特徴づけたいと欲する多くの命題が、その真偽の検査のための証拠を失っているために、検査することができないというエイヤーの批判が引用される。この三つの論点を挙げた後にクワインは、神の存在に関する仮説の検査が、人間の生の営みが自己統制的に成長することに存しなければならないとパースが主張する際、パースが全く別の真理論に足を踏み入れていると指摘し、また、パース哲学の「人間中心的偏向」(PPE, p. 32)を指摘した上で、次のように述べる。「おそらく、パースの真理の極限理論はそれ自体、科学的方法を実在を指し示すものとして表現する、一種の観念論か社会的プロタゴラス主義として、人間中心的に解釈されるべきである」(ibid)。

クワインの批判の論点を取り出すと、次のようになる。①最終的な方法論的原則としての科学的方法の想定。②無限な探求過程の想定。③本来は数に対して定義される極限概念の理論に対する誤った適用。④最終的に到達されるべき唯一の理想的結果の想定。⑤諸理

論の最終的な近似の想定のために必要な、諸理論の類似性に関する基準の不明確さ。⑥競合する包括的世界体系に関する同一性と差異性の問題。⑦歴史的出来事の検証の問題。

＜4＞ 論点の検討と汲み取れる問題

以上の論点を、パースとクワインの主張の相違を際だたせるという観点から検討し、両者の主張をふまえて、自然主義に関してどのような教訓が引き出せるのかを考察したい。ただし、あらかじめ⑤の論点は検討から除外する。というのも、この論点はこれまで考察してきたパースの独自の真理論よりむしろ検証主義一般に関わるものであると考えられ、またクワインもエイヤーからの引用をしているに過ぎないからである(13)。

まず①の論点、すなわち、最終的な方法論的原則としての科学的方法の想定という問題に関しては、クワインは具体的な批判を展開していないので議論を補わなければならないが、この論点は両者の相違を考察する上で重要な手がかりを与えるものである。というのも、ここで問題になるのは科学と常識の関係に関する両者の主張の根本的な相違であるからである。クワインにとっては、常識すなわち日常的信念と科学的信念は連続的に捉えられるものであり、質的に異なるものではないとされる。例えば、『ことばと対象』のパースに対する批判がなされる箇所では、日常的事物について語る常識的用語と、分子などの非日常的事物について語る物理的理論が対比され、そうした事物は、感覚刺激との関係の上では措定物として同等の身分を有し、日常的事物を措定する仮説と分子仮説とは、その機能と生存価という点で類似するとされる。これに対しパースは、科学と常識の関係に関してある意味でクワインとは対照的な見解を持つ(14)。「信念の確定」で論じられたように、科学的方法とは、信念の確定を目的とする探求に際して、探求者によって自覚的に選択されるべき一つの方法である。科学的方法は、他の前科学的もしくは非科学的諸方法と比べて優れた点を有し、それゆえ探求者によって選択されるべきとされる。科学的信念が科学的方法を選択した上での探求によって獲得されるものであるなら、それ以外の方法によって獲得される信念とは区別されるはずである。科学と常識の関係についての両者の相違は、自然主義に対する立場の違いを理解する上で重要である。特権的身分を持つ認識論を否定するクワインの自然主義からすれば、科学と常識は共に信念全体の一部であり、両者の間に質的区別はないと主張される。それに対してパースは、科学と常識を明確に区別し、その区別の理由といえる科学的方法の利点こそが、先に検討した実在及び真理に関する前提的理解なのである。このことからも、パースの反自然主義的主張の要点がこの実在及び真理に関する主張にあることを確認することができる。

次に②の論点、すなわち、無限な探求過程の想定の問題は、③の論点である極限の問題

にも関わると思われるが、クワインの主張はそれほど明らかではない[15]。しかし、自然主義の問題と関連させるなら、クワインが探求過程の無限性の問題を考えるのは、信念全体の展開がそうした性質を持つかという観点からであるのに対して、パースが探求の無限性に言及するのは、科学的方法を選択することの前提である実在及び真理の概念を明らかにするという観点からであると言えるだろう。つまり、パースによれば、探求者は科学的方法を選択することによって、無限の探求の果てに全ての探求者が合意する信念が真理であり、その信念が把握するのが実在であるという前提を受け入れるのである。

③の論点に移る前に、④⑤⑥の論点を一括して検討したい。というのもこれらの論点はいずれも科学理論の決定不全性に関わるものだからである。クワインは、我々が手にしうる世界に対する唯一の経験的証拠が感覚刺激であり、可能な全ての刺激が与えられても、その刺激と合致しながら相互に両立不可能な複数の理論があり得るという理論の決定不全性を主張する。この主張から、クワインは、経験と合致する複数の理論の可能性を論拠にして、真理の条件を無限の探求の果てに収束すべき極限理論に求めるパースの議論を批判する。そして、複数の理論を比較するための、類似性の基準（⑤）及び、同一性・差異性の基準（⑥）が明確にされておらず、翻訳の不確定性というクワインの議論からもそうした比較に問題が生じる以上、最終的に収束すべき単一の極限理論という想定はできない（④）とこの時点のクワインは批判するわけである。こうした議論はクワインの側の道具立てで構成されているので、直接パースの議論に適用可能かは明らかではない[16]。しかし、複数の包括的世界体系の真理性に関して、いかなる態度を取るべきかという問題は、その後のクワイン自身の議論でも問題になる。この問題は、二つの世界体系に対して、自らの体系を真と見なすセクト主義と、両方の理論を真と見なすエキュメニズム的立場との間の対立として議論される。そして最終的にクワインが採用した立場がセクト主義であり[17]、パースに対するクワインの批判の要点が、極限的な単一の理論に真理性を帰することへの批判であれば、クワインの最終的な立場からはパースとの明確な対立点はもはや生じないと考えられる。それゆえ、これらの論点はパースとクワインの相違点に関して、注目すべき示唆を与えるものではないことになる。

最後に③の論点、すなわち、パースの議論が本来は数に対して定義される極限概念を理論に対して誤って適用しているという批判は、直接的に真理の意味に関連する[18]。クワインは『ことばと対象』で真理を次のように特徴づける。「「真」という語を適用することが意味をなすのは、ある所与の理論に属する語彙で表現され、その理論によって措定された実在を完備しているような、理論の内側から見られた文に対してである」(WO, p. 24)。つまり、クワインにとって、我々がある文を真であると言うことは、単にその文を主張する

ことであり、それは常に現存する理論内部でなされることなのである。クワインがタルスキの真理の意味論的定義を採用するのはこうした観点からである。ところが、これと同様の主張はパースも行っている[19]。「信念の確定」で探求の目的を述べた後、パースは、信念が確定することに加えて、その信念の真偽を問題にすることに否定的な見解を述べる。「せいぜい主張しうることは、我々が、（真なる信念ではなく：引用者）真であると考える信念を求めるということである。しかし、我々は我々の各信念を真であると考えるのであり、そう言うことは単に同語反復である」（5.375）。つまりパースの議論は真理の意味論的定義を排除するものではない。可謬主義者として、パースもクワインも我々の現段階の信念が却下される可能性を認める。真理とは何か、真理は何を意味するかという問いに対して、基礎付け主義的認識論を批判したパースとクワインは共に、不可疑の絶対的真理という前提を認めることはできず、可謬主義的認識論の立場から現在我々が所有する可謬的な信念にとどまるであろう。

それでは両者はどの点で異なるのか。可謬主義的認識論からクワインは、我々には我々の持つ現在の信念以上のものは与えられていないのだから、そうした信念を真として認めようと主張する。しかしパースは、我々は現在の信念が真であると信じることができないのだから、真理は我々の信念とは別のものであると主張する。すると、パースにとって、我々の現在の信念と別のものである真理について、我々が正確に理解することはできないので、それについて正確な定式化も与えることができない。したがって、極限概念が類比であるという点は、パースにとって必ずしも批判になるわけではない。というのも、パースはこの概念が不正確な類比であることを認めると思われるからである。

ではなぜパースはこうした真理への理解を求めるのだろうか。パースが極限という真理の条件を主張するのは、信念の確定という目的を持つ科学的方法を選択した探求者共同体の探求という実践において真理が果たす機能を解明しようとする、真理のプラグマティックな特徴付けを目指すときである。つまり真理の意味論的理解のみならずプラグマティックな理解を求めるとき、真理の条件としての極限が主張される。ではなぜ極限という類比が用いられるのだろうか。その理由の一つは、パースが、科学的探求において真理が果たす最も重要な機能を統計学における機能に見て取っていたからだと考えることができる。つまり、統計学において真理は、標本が無限に近づくにつれて、値がそこへと収束するような極限として機能する。パースはこの機能の中に科学的探求における真理のプラグマティックな理解のための重要な模範を見て取ったのであり、その機能との類比によってプラグマティックな観点からの科学的探求における真理の特徴付けを目指したと理解することができる。そしてここには、測量などの実際の技術的研究に従事しつつ、そうした具体的

問題に関する実践的な考察から宇宙的規模の思索まで幅広く展開したパースであるがゆえに獲得可能であるような、科学的探求の実践に関する自覚的な洞察が含まれていると言えよう。

＜おわりに＞

パースとクワインは、共に哲学的考察において近代科学を称揚する立場を共有する。しかし、パースは常識と科学とを峻別し、科学的方法の本性と利点、そして科学的方法を選択すべき根拠を徹底して思索し、そうした思索から科学の前提を批判的に思索する地点にまで達した。それに対してクワインは、常識と科学を連続したものと捉え、科学の特権性に対して否定的であり、信念全体から離れた外部問題を否定し、実在や真理は信念内部、特に物理学によって与えられると主張する。この対立を解決するには、パースの超越論的な主張が可能であるのか、そうした主張が取り組む問題を自然主義的に扱うことはできないのか、という問題を検討せねばならない。

しかし、パースが提示する問題に自然主義的な取り組みをするとしても、パースの主張は自然主義に教訓を与えるだろう。つまり、両者の相違が生じる理由の一つは、両者の人間観の違いに求められる。パースが問題にしたのが、自覚的に自己の探求を反省し、自らが採用すべき方法を選択する主体的人間であるのに対し、クワインは、「私は物理的世界にある物理的対象である」(20)という物理主義的人間観が基本的な出発点である。このような物理主義的人間観が自然主義に至るクワインの議論から独立のものであるなら、科学が人間の構築物である以上、パースの主体的人間観と科学的探求の実践の重視とは、そうした自然主義的取り組みが十分に生かすべき教訓であるはずである。その意味でも、パースの哲学は今日の議論に反映すべき多くの問題を提起するものである。

＜註＞

(1)本論文は、次のフックウェイの論文から示唆を受けて成立したものである。Christopher Hookway, “Naturalism, fallibilism and evolutionary epistemology”, in *Minds, machines and evolution*, C. Hookway（ed）, Cambridge University Press, 1984.

(2)例えば、後に検討する「経験主義におけるプラグマティズムの位置」で述べられる自然主義の根拠は、全体論が要求する理論的語句の現象的語句による定義の不可能性と、素朴な実在論である。

(3)自然主義を考察する上での認識論的問いに関する以上の整理は、次の文献に従っている。Hilary Kornblith, “Introduction” in *Naturalizing Epistemology*, second edition, Kornblith（ed）, The MIT Press, 1997.

(4)クワインは、自然主義が認識論を経験科学の一章として置き換えられると述べつつ、それが依然として認識論であるとも述べる。またこれと関連して、認識論における規範性に対するクワインの態度に関しても同様の解釈の余地がある。Quine, “Epistemology naturalized” in *Ontological relativity and other essays*, Columbia University press, 1969.

(5)ハークはこの二つの側面を、改革的自然主義と革命的自然主義として区別し、前者の立場から自然主義

を展開する。Susan Haack, “Rebuilding the Ship While Sailing on the Water” in *Perspectives on Quine*, R. Barrett & R. Gibson（ed）, Blackwell, 1990; “The two faces of Quine's naturalism”, *Synthese*, 94, 1993.

(6)フックウェイが問題にするのは、パースが知識に関する哲学的問いに対して自然主義がもたらすものをかなり明確に見ていながら、断固として自然主義を拒否した理由である。Hookway, op cit, p. 2.

(7)パースの議論を概観する上で、以下の研究を参照した。伊藤邦武『パースのプラグマティズム』（勁草書房、１９８５）、「パースの科学的探求の基礎づけ」（『思想』、６８３号、１９８１）、「探求と倫理：パースにおけるプラグマティズムと規範学の理論」（『哲学研究』、５４８号、１９８３）、「パースの意味分析」（神戸大学文学部紀要、１４号、１９８７）、Nicholas Rescher, *Peirce's philosophy of science*, University of Notre Dame Press, 1978; Robert Almeder, *The philosophy of Charles S. Peirce*, Blackwell, 1980; Peter Skagestad, *The Road of Inquiry*, Columbia University Press, 1981.

(8)以上のような自然主義的主張につながるパースの議論に加えて、フックウェイは、１８７０年代から８０年代のパースの議論が当時の自然科学の成果を実際に取り込んでいるという事実を指摘する。しかし、こうした側面はその後の展開につれてパース自らが批判していく。Hookway, op. cit., p2; Hookway, *Peirce*, Routledge, 1985, p. 52.

(9)フックウェイによれば、パースの反自然主義的主張は、数学を頂点とする諸科学の基礎付けの順序を示す階層構造が提示される、１８９０年代の諸科学の階層的分類に見て取れる。それは１８６８年の一連の論文で強調された二つの主題を反映する。すなわち、論理学を心理学に基づける心理主義へのパースの反対と、推論の正当化の問題である。前者においては、真理の客観的観念によって定義される妥当性の客観的観念を採用した上での推論の客観的基礎付けが、後者においては、推論規則に関する循環の回避を要求する説得的正当化が、共に反自然主義的主張を示しており、特に後者の論点は超越論的立脚点を含んでいるとフックウェイは論じる。Hookway, op. cit., p4; Peirce, p. 53-58.

(10)“The Pragmatist's place in empiricism” in *Pragmatism*, R. J. Mulvaney & P. M. Zeltner（ed）, University of South Carolina Press, 1981. この論文は後に、本題であったはずのプラグマティズムに関する部分を除いた前半部分が「経験主義の五つの里程標」と題されて論文集『理論と事物』に収録されている。*Theory and things*, Harvard, 1981.

(11)Peirce, CP, 5.407.

(12)「経験主義におけるプラグマティズムの位置」では、ヒューム以降の経験主義の伝統において改善の指標となる五つの転換点が明示され、それを基準としてプラグマティストの主張が位置づけられると共に、クワイン自身がどの程度プラグマティストであるかを見定めることが主題とされる。パースに関しては、５つの転換点に関して示唆する部分こそあれ一貫して主張されているとは言い難く、また、真理論に関しても難点が指摘される。そして、デカルト的懐疑を反駁した点と、行動主義的な精神で意味論を形成しようとした点に自然主義的主張の先駆としての評価が与えられる。これに対するパースの立場からの再反論は以下を参照。Almeder, *The philosophy of Charles S. Peirce*, p. 33-44.

(13)A. J. Ayer, *The origins of pragmatism*, Macmillan, 1968, P37; また以下の論文は、デューイ、ミード、ルイスを中心に過去についての言明の検証という問題を考察している。柏端達也「過去の未来性と言われていたもの」（『西洋哲学史の再構築に向けて』、渡辺二郎監修、昭和堂、２０００、所収）。

(14)Hookway, “Naturalism, fallibilism and evolutionary epistemology”では、科学と常識に関するこの論点が、パースの自然主義的主張と反自然主義的主張を併存させる根拠であると論じる。

(15)探求過程の無限性、及び、単一の理論の受容による探求の究極的な終結に関する議論は以下を参照。Almeder, “Science and idealism”, *Philosophy of Science*, vol. 40, no. 2, 1973、なお、パースにとって探求者の共同体の構成員は地球外知的生命も含まれる。Rescher, op. cit., p. 96, note 27.

(16)例えば、クワインの議論では探求者同士の相互批判の側面が重視されていないと考えられる。

(17)“Reply to Roger F. Gibson, Jr.” in *The Philosophy of W. V. Quine*, second edition, Open Court, 1998.

(18)以下の考察には次の論文を参考にした。Peter Skagestad, “Peirce's conception of truth” in *Naturalistc Epistemology*, Abner Shimony & Debra Nails（ed）, D. Reidel Publishing Company, 1987. この論文は、自然主義において、科学が実際に真理を生み出すかどうかという問いに経験的回答が可能だと想定されているにもかかわらず、クワイン（及び自然主義は取らないがポパー）の議論からは否定的な結論が導かれるとし、これを自然主義の基礎にあるジレンマであるとして、その解決をパースのプラグマティズムに求める試みである。また、パースの極限概念が誤った類比であるというクワインの批判に対して、保守主義といったクワインの認識論上の中心的な概念も同様の類比が含まれており、当のクワイン自身の認識論がその批判か

ら逃れていないという指摘もある。Richard Creath “Quine and the limit assumption in Peirce's theory of truth”, *Philosophical Studies* 90, 1998.
(19)この点に関わると考えられる全体論の問題は本論の主題上、除外して考える。
(20)Quine, “The scope and language of science”, in *The ways of paradox and other essays*, revised and enlarged edition, Harvard, 1976, p. 228.

＜引用略号＞
引用箇所は著作集の巻号と節番号で示す。
CP：*The Collected Papers of C. S. Peirce*, Cambridge, Mass., 1931-35, 1958.
WO：*Word and Object*, W. V. Quine, MIT Press, 1960.
PPE：“The Pragmatist's place in empiricism” , Quine, in *Pragmatism*, R. J. Mulvaney & P. M. Zeltner（ed）, University of South Carolina Press, 1981.

〔哲学博士課程・日本学術振興会特別研究員〕
＊本論文は、文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。